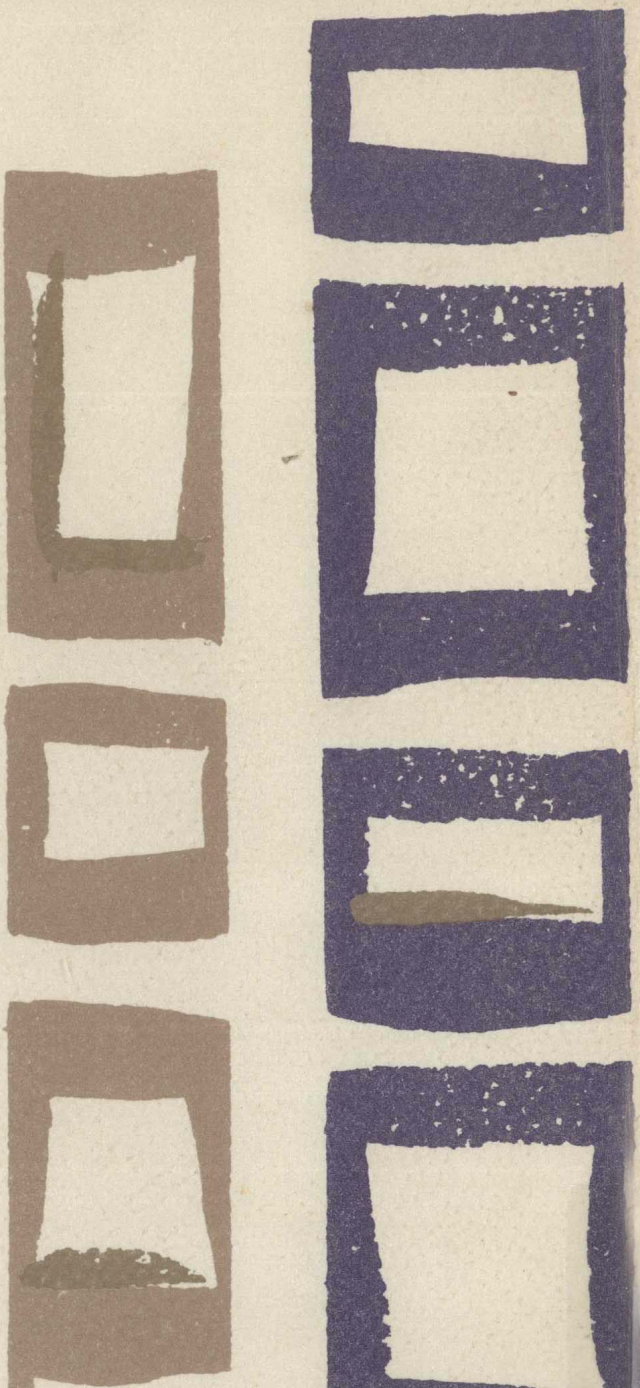
詩歌折々の話

大岡信



詩歌折々の話

大岡信

講談社

NDC 302 244p 18.8cm

詩歌折々の話

定価一二〇〇円

昭和55年9月10日　第1刷発行

著者　大岡信

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目12―21
郵便番号112
電話東京(03)九四五―二二一(代表)
振替東京八―三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大製株式会社

☆落丁本・乱丁本はおとりかえします。

©大岡信

0092-169495-2263 (0)(図説)　1980年 PRINTED IN JAPAN

まえがき

古典を読むうえでどんな心がまえが必要ですか、というような問いを受けて答えに窮することがある。詩や歌を読みたいと思っても、なかなかむずかしくて、と問いかけられて、簡便な答えはないから困惑することもある。むかしは私にとって、古典文学、古典詩歌というものと、近代以降の詩や歌というものとは別々に切り離されて存在するものにすぎなかったから、古典について問われても困惑し、近代、現代の詩について問われても困惑するという有様だった。

それが近年は、私自身、古典詩歌と現代詩歌のあいだに本質的な区別を設ける必要などないという考えになってきていて、何かを書く場合でもその態度で書くので、いきおい、古典を読むのにはどうしたらいいのか、という問いと、近代、現代のものを含めて、広く詩や歌を読むのにはどうしたらいいのか、という問いが、合わせて一本という形で投げかけられることも多くなり、そのたびにますます答えに窮して頭をたたく仕儀となる。

私は古典文学の専門家でないうえに、古典文学についての知識素養たるや我流もいいところ、人さまに助言できるような何の備蓄があるわけでもない。右のような問いを受けて私が困るのは、そもそも何らかの「心がまえ」をきめて古典を読んだという経験がないので、段取りをつけて、こうして見たらいかがです、さもなくばああして見たら、と適切な知恵を相手に伝えるような器用なことはできないのだ。

近代・現代の詩についても、おおむねは同じ。ただしこちらは、自分が詩の実作について多少は苦労もしてきたと思うし、また、くちばしの黄いろいころから、現代詩人たちの傑作、佳作、凡作、それに加えて愚作にも結構たくさん付き合ってきたので、それなりに経験上の知識を話すことはできる。それでも、詩歌を読むのに何かの「心がまえ」が必要だというようなことは、いついかなる場合でも念頭に浮かんだことがない。

さて、心がまえはいかにあるべきや、と聞かれても答えられないが、あなたはどのようにして古典文学や近代、現代の詩歌を読むことを楽しんでいるのか、と問われるなら、これには私も答えることができる。我流には我流なりに楽しみがあると、大いに吹聴もしてみたい。実際私は、古典文学を自分の楽しみと養いのために読んできたし、その楽しみが時にはひどくこみ入った、頭をきりきりしぼらなくてはならない調べごとの領域にまで私をひきずりこむことはあるにしても、もともと自分の楽しみのためにやっている以上、文句をいう筋合のものではなかった。面倒な調べごと自体、おもしろくて仕方がないはずである。いつもそんなにうまくいくとは限らないが……。

古典を読む「心がまえ」を問われて、どうしても答えねばならないときには、仕方がないから、「おもしろいと思ったら読む、つまらなかったらやめる、それだけではないでしょうか」と答える。相手は、「その、おもしろいと思ったら、というところまで行くにはどうしたらいいのです、それがわからないから聞いてるのだ」と追いかけてくる。こうなってはもう並行線、どうしようもない。相手もいっしょに食べたものならその料理の話もできるが、なぜか食べてみようとしない人に、この料理はかくのごとき理由において天下一の美味なのだ、といくら説いてみても始まらない

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

というのが私の考えである。

たぶん、最初に飢えや渇きがなくては事は始まらない。飢えがあれば、目の前にある食べものに手を出すのが人間の自然である。ひどく飢えていれば、ひたすら夢中で腹の中へおさめてしまうだろう。少し腹がくちくなってきてはじめて、あちらは美味だがこちらはどうも、という弁別もできてくる。弁別、すなわち人それぞれの好み。この好みというもの、気どって言えば趣味というもの、これこそ、古典文学であろうと近代、現代の詩であろうと読もうとする場合に、もっとも信頼できる私たち自身の導き手であって、かりにあなたが定評ある注釈書と首っぴきで大部の古典作品を読もうとかまえてみても、その本が自分の趣味にどうしても合わないのなら、さっさとやめたほうが心の健康にいい。

ただし、それはむこうが悪いのではなく、こちらのほうに趣味といえるほどのものがまだできていないからである場合がある。場合がある、というよりも、そうである場合がほとんどかもしれない。だから、十年後にもう一度その本に、今度こそ楽しくて仕方がないという付き合い方で再会できる可能性はつねにある。古典にせよ、近代、現代の詩にせよ、あちらはどこへも逃げてはいかない。いつでも本の中でこちらを待っている。ずいぶん気のいい人たちなのだ。

この私の本は、そういう考え方の人間が、折りにふれて人前で話す機会のあった話をまとめたものである。講演集というものを出すのはもちろんこれが初めてで、書いたものをまとめるときとはどうも少し勝手がちがう。面映ゆい思いがある。けれども、この数篇の、長短いろいろの話は、いずれも私としては、それぞれの題目のもとに語ってみたかったことばかりで、お座なりなものはな

い。中に一篇、現代美術についての話があって一見場違いなように思われるかもしれないが、話者としては少しも場違いなものとは思っていない。読んでいただけば、それがわかるはずである。

一九八〇年八月

大岡　信

目次

まえがき……1
詩の世界とわたし……7
うたげの場に孤心をかざす……67
詩人としての天心……119
牧水の旅と歌……137
歌と詩の別れ……159

現代世界の芸術……191
何が詩を生み出させるか……217

装幀・榎本　和子
制作協力・ヤマウチプロダクション

詩の世界とわたし

はじめに

詩については、人それぞれに考え方があると思いますが、現代日本の場合には、短歌、俳句をも含めて詩と考えるべきですので、おそらくここにいらっしゃる方の中にも、「私は俳句が好きだ」とか「短歌をときどき読んでいる」という方がおられるだろうと思います。「若いころには萩原朔太郎の詩が好きだった」というような方もたくさんいらっしゃるかと思います。

きょうは、私が過去に読んできた詩について、これはこういうところがおもしろいと思うという点についてのお話をしようと思いますが、自分もその詩についてはこういう思い出があったというようなことがみなさんのほうにあれば、まず上出来ではないかと思います。話は和歌のことになったり、俳句のことになったり、いろいろなことになるでしょう。

1　詩とは「虚」の世界に遊ぶもの

なぜ人は詩を書いたり読んだりするのか。これはなかなかの難問です。しかし、われわれが詩を読むとき、どんな心の状態にあるかを考えてみると、少なくとも次のようなことはいえるでしょう。つまりわれわれは詩の中に、実業の世界で求めるようなものとは全然異なるものを求めているということです。私は詩というのは、「実」の世界に住んでいる、また住まざるを得ない人間の、なぜかわからないが非常に欲することのある「虚」の世界の一つだろうと思っています。このことは、詩人の職業と作品

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

との関係を例にあげて考えてみるとわかりやすいかもしれません。

エリオットの「荒地」——絶望的な詩によって一躍有名になる

ノーベル文学賞を与えられた世界的に有名なトーマス・スターンズ・エリオットというイギリスの詩人、この人は、二十世紀の詩人を何人か挙げて語る場合にはどうしても欠くことのできない人ですが、アメリカのセントルイス生まれで、早いうちからロンドンに渡って、イギリスに帰化しました。最初銀行に勤め、のち出版社に迎えられて重役になりました。

その人が書いて最初に有名になったのが「荒地」という題の詩で、英語でいいますと“The Waste Land”です。「荒廃してしまった土地」という意味ですが、これは第一次大戦後ヨーロッパならびに文明諸国の都市生活の荒廃をいろいろな面から象徴的な材料と構成で書いている。

たとえばサラリーマンの生活が、表向きはふつうに営まれていても、内面においては生きがいもなく空虚で絶望に満ちているというような点を、印象的なエピソードと哲学的観察によって多面的にえぐっております。この詩は長編の組詩ですが、彼はこの絶望的な詩によって一躍有名になりました。

エリオットは銀行員、ついでロンドンの出版社の重役として暮らしたので、実生活はきちんとしていたわけです。その一方、精神世界の暮らしの中ではそういう詩を書いておりました。これは詩の生み出される場というものの不思議さの一例になるかと思うのです。

田中冬二――人が思いつかないような空想的な世界に遊ぶ

日本の田中冬二という人も銀行員としてきちんとした生活を送った人です。この方は詩壇の長老といっていいお年ですが、かくしゃくとしておられます(注　一九八〇年逝去)。昭和の初めから愛読者が多くて、現在でも田中冬二の詩が好きだという人は多いでしょう。旧制中学を出てすぐに銀行へはいり、定年まで勤められました。作品には銀行生活を書いた詩もほんの少々ありますが、まったくそれと関係のない詩が多くて、日本の田舎、とくに信州、上越方面あるいは中国地方の松江あたりの詩が多いのです。これはご自分のお勤めになった場所がいろいろなところを転々としておりましたから、その関係もあると思いますが、もう一つには、都会生活とは全然別の、日本に古くからある人情、風俗、習慣、風景、いわば化学染料で染められた服ではなくて、木綿を紡いで植物染料で染めて……という、昔から保たれてきた着物の味のような、しかし同時にモダンな詩を一貫して書こうという態度をはっきり持っておられたからです。

この田中さんの詩なども、詩だけ読んでみますと、田中さんがどういう日常を送っていたかということはよくわかりません。しかし、全体としてみると、この人は美につかえる詩人としての生活信条を厳しく持っていて、現実には紳士として過ごされたに違いないけれども、空想的な世界では人が思いつかないような世界に遊んでいます。

詩は、本質的には変わっていない

たまたま銀行員をしていた詩人を二人あげましたが、詩というのは、先ほど申しましたとおり、日常

「実」の世界に生きている人間が、理由はよくわかりませんが、なぜかそれなしには人間として空虚でカサカサにひからびてしまうように感じられるあの不思議な「虚」の世界に遊ぶものです。その意味で人に必要なものであるといえると思うのですが、詩を書いてそれを「実」の世界にしてしまおう、たとえば、早い話が、詩を書いて有名になれば、それで飯が食えるのではないかと思うような若い人がこのごろわりといるのです。しかし、これをやろうと思うと、たちまちにして生活自体が「虚」になって、(笑)結果としては飯が食えなくなります。

私などは、敗戦のときがちょうど中学の三年生で、いわゆる旧制の学校制度で大学まで出た人間ですから、詩で食おうなどとは初めから考えもしなかったのですが、このごろはマスコミが発達して、テレビその他の影響で、自分で作詞作曲をして、自分で歌うということがわりあい気楽に若い人の中で行われるようになっていますから、ついつい詩も簡単にできると思って、私などのところへも不思議な電話とか手紙がくることがあります。

われわれが中学時代のころは、親に隠すようにして詩を読んだものでした。たとえば萩原朔太郎などの詩には、エロティックで、少年が読んでちょっと刺激が強すぎるような詩もありますが、自分で、これはおやじに知られるとまずいと思いますから、そっと隠して読んでいました。そういう意味では、詩を読むのは一種隠しごとのように思っておりましたので、それで世間的に有名になって金がざくざく入ってくるとか、女にもてるようになるとかいうことは全然考えもしなかったのですが、近ごろでは詩もいわゆるマスコミ化されたような観点から若い人に受け入れられている面があるようです。その点では少々世の中が変わってきたかと思いますが、本当のところは、昔からいまに至るまで、詩は本質的にそ

んなに変わってはいないように思います。

たしかに詩は人の心を打つ

私の知り合いに遠山啓という数学者がいます(注　一九七九年逝去)。数学者としてだけではなくて、教育問題でも非常に活発に発言なさっている方ですが、この遠山さんがあるときこんなことをいわれました。「大岡さん、コンピュータ時代になると、世の中はますますのんびりしてはいられなくなりますね。私などは、二十一世紀には世の中がどうなるかということを考えますが、学問や芸術の中で最後に残るのはどうもきっちりと割りきれるものではない、あいまいさを豊富に持っているものなのではないかと思いますよ。人間が昔からいまに至るまで伸ばし続けてきた能力の中で、たとえば正確に計算できるといったたぐいのことは、いまでは機械がどんどんやってしまう。ところが、機械ではどうしても人間に及ばない能力というのがあります。それは何かというと、あいまいな前提から出発して、あいまいな結論のまま終わることのできる能力、それでいて、全体のバランスはちゃんととれ、安定しているという能力ですね。そういう能力が人間にはあって、それが結局、最後まで人間独自のものとして残るのではないかと思いますよ」とおっしゃったわけです。

遠山さんの考えでは、芸術とか詩とか文学がいちばんあいまいな要素を豊かにもっているものだろうというわけで、「将来生き残るのは、芸術家とか詩人とか、夢みたいにわけのわからぬことをやっている人々ではないでしょうかね」と、半分ふざけておっしゃったのです。確かに詩は、古い時代から書き継がれてきて、何となく現実生活には役に立たないようにみえながら、人々の心をとらえて慰めたり感激

させたりしてきた。その点で人間の一番原始的な能力に近いもので成り立っていることは確かですが、そういう力を詩が持っているのはなぜかということになると、明確な理由づけがなかなかできない。にもかかわらず、たしかに詩は人を打つ。そういう点で遠山さんの話に私も興味を持ち、また共感したわけです。

いまに至るまで生き残っている原始的な能力

詩は、人間の心のわけのわからない衝動とか、理由づけはできないけれどもどうしても動かしがたく自分に感激を呼び起こすとか、非常に悲しいとかいう思いから出発して、それが言葉になり、文字になって大勢の人に読まれるものです。作者とは全然別の時代、別の場所で別の生活をしていながら詩を読んで心を打たれる。その間、一人の人の中から生まれた詩がほかの人に伝わる経路は、実は非常に偶然的で、たとえばコンピュータで計算できるようなものではない。日本でいえば『万葉集』などに入っている無名の歌人たちがつくった歌に、いまだにわれわれの心を動かすものがある。ここのところがほかの科学的に説明がキチンとつくようなものとは違うのです。

私は詩を書くだけでなく、詩について書くということもやってきて、批評文や詩史的なものを書いてきましたが、一編の詩が作者のどういう状態から生まれて、私なら私をどういうふうに打つかということの説明をしようとすると、じつにむずかしいのです。わずか一編の詩について自分はどう考えるかということでも、その日その日によってずいぶん違うことがあります。にもかかわらず、とにかくその詩をいいものだと判断するときの自分の勘というか能力というかについては、ある種の自信がないわけで

はない。この能力は、人間の中にあるいろいろな能力の中ではまことに原始的で、うまく説明がつかないけれども古くからいまに至るまで生き残っている能力、つまり動物的本能に近い判断能力かと思います。

2　父親から受け継いだ言葉がそこに出てくる

若いころの父の歌

その程度の考えでいるわけですが、私自身の場合、おやじが歌人で短歌をつくっているものですから、子供のときから短歌を読むことにはごく自然になれていたのです。私は静岡県の三島で生まれましたので、箱根は親しい場所ですが、私のおやじが箱根山の芦ノ湖で若いころにつくった歌があります。二十五歳ごろにつくった歌で、夕暮れの芦ノ湖を歌っています。

水鳥の背に残りゐる夕明り湖(うみ)暮れゆけばただ仄(ほの)かなる　　大岡　博

山の西の方に夕方の太陽が落ちていく。湖全体が暗くなって、自分のいるなぎさの近くに泳いでいる水鳥の背中にだけ光がまだほのかに残っているという歌で、一つの風景の中での水鳥の点描にすぎませんが、私は初めてこれを読んだときに、なるほど、おれのおやじはこういうおやじかと思いました。

この歌は、父親が最初に出した歌集『渓流』(昭二七)の冒頭に載っておりますので、いってみれば公

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook